《修士論文要旨》

十六世紀中期における備後の在地領主と大名勢力との相互関係について

―山内首藤氏を主題として―

竹岡健次*

元来、戦国時代を取り上げた論文や論考は多数存在している。その中でも、西日本を代表する戦国大名である毛利氏は、戦国大名の中でも特異な例として注目されており、多くの研究が行われている。しかし、これらの研究のほとんどが毛利氏にその主眼を置いたものであり、在地領主側に主眼を置いたものはほとんどない。さらには、多層的である、といわれる[1]毛利氏の領国に内包されていた在地領主を取り上げた論文は少数であり、研究の余地がある、と私は考えている。

そこで、これらの在地領主に主眼を置いて研究することとし、その中でも代表的な勢力である山内首藤氏を題材として、毛利氏が拡大していく中でそこに内包されていった在地領主の動向について、その内面と外面の双方から検討することにした。そして、毛利氏に従属していった在地領主について、山内氏を題材として研究を行うことで、毛利氏とその他の在地領主との差異を明確化し、毛利氏による領国形成とそれに内包された在地領主との関係を明らかにすることができる、と見ている。また、「自力論」を用いることで、山内氏に代表される毛利氏旗下の独立軍団、旧来の在地勢力がいかなる動きによって毛利家臣団、最終的には長州藩へと移行していったのか、ということを示していきたい。

そのうえで、山内氏は尼子氏による攻撃の後、その惣領（山内家当主）の権限を復活すべく外圧を利用して内部組織を建て直した。そして、その流れをもって毛利氏の旗下に入り、織豊・幕藩体制の内部へ取り込まれた、という仮説をたて、それを内外双方と地理的要因という三面からアプローチしていきたい。

年代としては、『山内首藤家文書』において備後守護・山名氏に代わり尼子氏に関する文書が発現する天文元年（一五三二年）を上限とし、毛利氏に知行目録を提出して完全な主従関係にはいったといえる天性十四年（一五八六年）を下限とする。

序章　山内氏とその本拠地・地毘庄

山内氏は、地毘庄を承久の乱によって獲得した。[2]そして、南北朝以後、西国へと下向した山内氏は、地毘庄を本拠とするとともに、その

平成16年度　*文学研究科文化財史料学専攻

所領を分割して統治する方式をとった。そして、庶家を処々に配置するとともに、のちの「家中」組織の基本となる一族一揆をもって、一元的な支配をもくろんだ。[3] もちろん、荘園領主との争論もあったが、それを解決した上で、守護である山名氏と関係を持ち、備後を代表する在地領主としてその実力を蓄えていった。また、山名氏の衰退後は大内氏と関係を持ち、大内方の備後における有力な勢力として活躍している。

一方、その本拠となる地毘庄は、山岳を中心とした庄園であり、一元的な統治が難しい入り組んだ地形を持っていた。そのため、庶家配置による一族一揆をもって、その統治をおこなったのではないだろうか。

第一章　山内氏とその「家中」の天文期以後における変遷

山内氏は、当初はそれ以前の体制を維持し、大内方として機能している。しかし、尼子氏の攻撃によってその内部構造は壊滅的になり、当主交代も迫られた。[4] それによって、山内氏は自力を大きくそがれ、それまで維持していた勢力の自力保持が難しくなった。

それゆえ、山内氏は早期の体制復興をはかった。そして、自力では不可能な部分について、大内氏や尼子氏、そして毛利氏の力を借りる形で、内部構造の再建と惣領・隆通の権威復活を、山内氏中枢部は図ることになった。

最初、中枢部はその力量が弱く、強力な統治能力を持ちえなかったが、大勢力の力を借りることで勢力を復権し、同時に毛利氏がもっていた調停権をも利用してその勢力確保をはかった。山内氏は、こうして自己の内部組織を再建できたが、一方でその自力の回復には至らず、外部保証の元での惣領権威復活にとどまった。そして、内部における締め付けもそれほどではなく、毛利氏への依存度が強まるにつれて本来の形態は壊れていった。

第二章　天文期以後の山内氏と大内・尼子・毛利氏との関係について

山内氏は、初期において大内氏と関係を持ち、備後を代表する勢力としての地位を持っていた。しかし、尼子氏による攻撃によってそれまでの体制が大きく崩壊し、尼子方へ引き込まれるとともに、[5] 備後に対する影響力が強い側へと何度も移行を繰り返す、自力の弱い勢力へと転落した。[6]

その中で、大内方として尼子の圧力を排するとともに、独自の人脈を作りつつあった毛利氏との関係が起きた。もともと細いながら山内氏と関係があった毛利氏は、山内氏に対して条件付きでの関係構築を提示し、山内氏は周辺との調停を含めた条件を提出することで毛利氏に接近した。[7]

毛利氏に接近し、その関係が強化されたとはいえ、初期段階では毛利氏とほぼ同列関係であった。しかし、山内氏はその内部に不安定性を抱えており、毛利氏の保証なしではその勢力を維持することが困難であった。そのため、山内氏は毛利氏との関係において徐々に従属的なものになっていくことになった。[8]

そして、毛利氏にその関係強化と山内氏の勢力保持を同時に求めることで、山内氏は毛利氏旗下の独立軍団としての地位を確保し、同時に毛利氏としても足利将軍との対応をさせるほどの重要な地位を占める勢力となった。[9]

ただ、毛利氏にとって山内氏は近距離にあるため脅威となりうる存在であり、毛利氏を脅かしかねない存在であった。そのため、毛利氏内部を構成し、一族として毛利氏を支えていた吉川氏が山内氏と接近し、その重臣である熊谷氏と姻戚関係を結ぶとともに、次期当主同士が義兄弟関係を構築して[10]山内氏勢力の毛利氏からの離脱を防ぐ方策をとった。

山内氏としては、毛利氏との関係の強化によってさらに強い後ろ楯を得ることになり、勢力維持と拡大に大きく寄与することになった。双方の意図は異なるが、結局のところ毛利氏による山内氏従属化が進行することになった。そして、山内氏は庶家である多賀山氏とともに一軍団を形成し、毛利氏方の強力な戦力となった。しかし、毛利氏としてはその離反が直接本拠の危機につながることから、完全に従属化させることを意図した。そして、毛利氏が豊臣政権へ組み込まれたのち、豊臣氏による引き抜きを恐れた毛利氏によって、山内氏は人質と知行目録の提出を求められ、[11]これをもって完全に従属化することになった。山内氏としては、現状を維持するだけでよいとしていたが、毛利氏は体制をより中央集権型に移行しつつあり、それに山内氏を始めとする毛利領内の在地領主を組み込むことで、それまでより強固な体制を構築することを意図していた、と言える。山内氏にとっても、これによって毛利氏の強固な保証を得ることになり、山内氏自体の内部構造は消失したものの、知行目録を提出することで、山内氏として生き残ることができた。

第三章　山内氏と地毘庄、その周辺の地理的要因について[12]

山内氏が本拠としていた地毘庄は、中国山地に位置していることから山岳が主たる面積を占めており、川沿いにある平野と小盆地程度しか平野が存在しない。さらに、中央部に一〇〇〇メートル級の山地が聳えていることから、惣領家の所領である南部と多賀山氏の所領である北部とは大きく分断されている。さらに、北部は出雲と南北交通で直結しているのに対し、南部は安芸や備中との東西交通や備後南部との交通が発達している。これらの条件から、山内氏が尼子氏の圧力を直接受けたことも、また大内氏や毛利氏と関係を持つことができたのも、その双方の地理的要因が傍証として存在していたことが見える。

第四章　まとめと結論

以上から、山内氏は、尼子氏の攻撃によって失われた自力による所領統治と内部組織を回復すべく、大内・尼子双方の間を行き来した上で、最終的に毛利氏へと従属する道を選んだ。山内氏としては、毛利氏による従属化の道筋に導かれた、といえる状況であり、山内氏が自力での勢力回復が不可能であった状況が、最終的な毛利氏との関係構築と従属につながった、といえる。

注

(1) 池享「戦国大名領国における重層的領有構造—毛利領国を例として」(『歴史学研究』四五六号、一九七八年)。
(2)『山内首藤家文書』一。
(3)『山内首藤家文書』二五。
(4)『山内首藤家文書』二〇六。
(5)『山内首藤家文書』二〇六。
(6)『山内首藤家文書』二〇六、二〇七、二〇九、二一四、『毛利家文書』二八六。
(7)『山内首藤家文書』二一六。
(8)『山内首藤家文書』二二二、二二三。
(9)『山内首藤家文書』二三五、二四八、二四九、二五〇、二五一、二五二、二五四。
(10)『山内首藤家文書』二四六、二四七。
(11)『山内首藤家文書』二八七、二八八、二九〇、二九一、二九二、二九四。
(12) 本章は『広島県中世城館調査報告書　第四集』(広島県教育委員会、一九九六年)と、それに所収された地形図による。